

打木村治作品集

打木村治作品集

まつやま書房

打木村治作品集

1987年(昭和62年)7月15日 初版第一刷発行

定 価 1 5 0 0 円

著 者 打 木 村 治

発行者 山 本 正 史

印刷者 大 澤 光 雄

印刷所 光 徳 印 刷

製 本 熊 谷 製 本

装丁 坂 谷 和 夫

発 行 ま つ や ま 書 房

〒355 埼玉県東松山市松葉町3-2-5

☎0493-22-4162 振替 東京9-70394

©1987 MURAZI UCHIKI 乱丁・落丁本はおとりかいたします。

目次

耽美地獄 3

原罪歌の人 31

亀 45

喉 佛 79

落日の賦 121

小坪物語 149

支流を集めて 221

あとがき 258

打木村治の文学について 榎本 了

各篇の本文は次の雑誌、単行本を採用した。さらに今回発刊に当り本文を推敲しているものがあるが、特に推敲しているものは「耽美地獄」と「落日の賦」の二作品である。初出雑誌について、特に必要なものは記しておいた。なお旧漢字、旧カナづかいは原則として新漢字、新カナづかいとした。

「耽美地獄」

「文芸飯能」創刊号、昭和五十六年二月発行。初出は

「文芸日本」昭和二十九年二月発行

「原罪歌の人」

「文芸飯能」第七号、昭和六十一年十一月

「亀」

「文芸埼玉」第五卷、昭和四十六年三月。初出は「農

民文学」第十五号、昭和三十三年十二月

「喉佛」

「文学評論」創作特集号、昭和十年六月

「落日の賦」

「文芸飯能」第二号、昭和五十七年三月

「小坪物語」

「作家群」打木村治特集号、昭和九年八月

「支流を集めて」

「士とふるさとの文学全集」（家の光協会刊）第三号、

昭和五十一年十一月。初出は「文学界」昭和十二年十

月

耽美地獄

庭にアトリエを建てた。狭いのはしかたがない。我慢どころだ。そう思って画家のMは満足していた。カーテンで仕切った三畳のたたみの部屋がつけてある。床のあがった部屋で、カーテンをわきへよせれば、^{なまこ}框に腰がかけられる。必要とあれば、框の下からは脚のみじかい寝台が引っぱり出せる。これは重宝なやつだ。寝台と気づかぬ客人は、小物を入れる抽斗ぐらいにしか思わない。

こいつを引っぱり出してMはごろりとひっくりかえる。新聞雑誌を読む。その名も泰平楽寝台だ。窓は肘掛窓が一つ。何年か前一度手を入れたきりの庭樹が、枝をひろげ放題にひろげ、野木となったおかげで夏は蝉しぐれが聞ける。南のすみに水道がひいてあって、向かいの家に使わされている。

午後、陽盛りを過ぎてからもねむい。蝉しぐれと水道の音とが一つになって聞こえている。Mは読物から顔をあげた。向かいの家の小娘が上半身裸で洗濯の最中である。これはこれとおどろいた。向かいの玉ちゃんにちがいないのだが、それが玉ちゃんとすぐにわからなかったのだ。

された。あの子いつからあんなオッパイになったのだろう。

Mはアトリエに降りて、急いでスケッチ・ブックとエンピツを持ち出した。こんどは三畳のたみの上に這い上がった。寝そべて、窓わくの上から顔だけ出して写生をはじめた。いくつになるのかなあの子、とエンピツをうごかしながら玉代の歳を考えた。十六。たしかそうなる。新制中学二年までいって、勉強が嫌いで、ずるずるとやめたみたいになっこうになり、間もなく、S鉄道の農場に通い出した、と聞いたのが二年ぐらい前だから、と彼は玉代の歳をそう決めた。

玉代は洗う手をやすめた。ちょっとあたりを憚る様子で、手が石鹼で泡だらけのまま立ちあがった。モンペと見たのはあやまりで、男もののズボンだった。すそを膝の上までまくりあげている。白い脛だ。背中の肉の薄いごとく脛の肉も薄い。戦後のことで栄養不足はおたがいさだが、それなら何故のあの乳房かといいたいくらい、胸だけが別仕立である。彼女は手の泡を樹の幹になすりつけた。悠々と準備万端をすませると緑の蔭にしゃがみ込んだ。それからMは玉代の身体からほとばしるういういしい水笛の音を聞いた。

Mの眼に、青葉に囲まれた真横からの玉代の乳房と、翳の深いあばら骨の印象とが強く残った。彼は彼女の私用の終わるまで、よんどころなくエンピツの運動は小休止である。こんなときなるべく煙草は喫わぬがよろしい、と気がついたのは賢明であった。おろしたズボンを引き上げ引き上げ、まだ白いお尻が半分隠し切れぬまままで彼女がたらいの脇に戻って来、それからずっとMの窓を気にしたのを見たときそう感じた。彼女は安心したらしく、こんどはこちら真正面をむい

て洗濯にとりかかった。

「玉ちゃん」とそこで彼は声を投げた「そのまま顔をあげてこっちを見てくれないか」

びっくりして彼女は顔をあげた。彼女の眉毛が雁がね型に一本につながってみえたので、円空上人の鉈彫の所謂「円空仏」にどこやら似かよってみえた。彼はおもしろい顔だと思った。その顔で彼女は思いきりこっちを睨んだ。

「いやーだ、おじさん……描いてたの！」

せいぜい十か十一の女の子の顔でしかない。いまだき少女は十六ともなれば、そろそろしゃれ気が出てもよいのに、この娘はお下げ髪だ。二本に編んで、それを裸の肩に振分けに垂らしている。髪と乳房が協力し合うと、これは女の極意となる。したたかになる。

彼は反応を待っている。

「どうするん……？　こうするん……おじさん？」

と彼女は世話をやかせず、素直に、実はしゃあしゃあと、Mのいったようにしてくれた。

「ありがとう。だが慾をいうとね」と彼はいった「そこじゃあないんだ。よかったら、いま玉ちゃんがおしっこしたところへ行ってくれないか」

「まあ！」と彼女は身体をくねらした「やーだ……おじさんたら！」

しかし彼女は樹間に分け入り、こんもりした寄せ満天星トウダイグサの上に裸の上半身を露わしてくれた。「この顔は」と彼は写しとりながら呟いた「誰かに似ている」

何処で見た顔か思い出せぬまま、素描は終わった。

「描けた？」と、見るのは権利といったふうに、まだ水ふやけしている手で窓へ近づいて来る。Mは眼を見はった。かつてこれほどあけすけな乳房の挑戦に合ったためしがないからである。普通に成熟したモデルから受ける意欲というものは、調和が先行して、その調和のそとにはびこせたいのっぴきならぬ何かに乏しい。こんなわがままを掻き立てゆさぶってくれる何か、たとえこの少女に見るような乳房とあばら骨のアンバランスの美といったようなものだ。こんな驚きをこの娘以前に見たことがあるだろうか。いまそれが目の前に挑戦して来る。彼女は胸を張った南太平洋の貴婦人みたいな物腰で窓辺に迫って来た。

「見せて！」

「そんな手をして」といいながら、彼はスケッチ・ブックを彼女の胸近くまで持っていた「さわっちゃいけないよ。玉子ちゃんは、こんな顔になるんだ、絵にすると」

「まあ、にくらしい顔。こんなのいやだ」

「いい顔なんだよ、これで」

タンポポの花かなにかのように、彼女の胸の片方の山が、Mの手の甲にふれている。吸いよせて放さない何噸の重さの触感が来る。

「また描いて」

「気に入ったかい？」

アハハと笑って彼女は自分の胸に眼を落とした。絵とくらべている。

「こんなに大きいかしら……」

不服そうに彼女は窓わくに腕を重ねた。背のびしてアトリエの中をのぞき込んだ。腕と窓わきの間で、乳房は乱暴な仕打ちを受けている。

「あそこの……あんな絵いやだね」

と、壁にある裸婦の絵に一言残して水道端へ戻って行った。乳房に窓わくの跡をつけて行った。その一の字の赤い線が無慙ともみえた。

アトリエの壁で、ああこれだ、と玉代が似ているモデルがわかった。彼が従軍中に南方で描いた原住民の少女である。

煙草を喫った。安心して窓からけむりが出せた。この夏中、彼女はあそこで洗濯をするだろうが、もういくら喫っても彼女は僕から逃げないだろう、と勝手に決め込みながら。

声の大きい、閑取のような彼女の母親が現われた。肌脱ぎになると、一升ビンぐらいの乳房が垂れ下がる女である。いまもそうだ。

「これしきの洗濯に、いつまでかかるんだ。さっさと洗っちまえ！」

玉代は微動だにしない。そのムツとした顔の変化を、Mはこっちから観察している。壁の少女にますます似てくる。

「いい歳しやがって、みっともねえぞ、何んか着ろ！」

「母ちゃんだって……」

「母ちゃんは娘じゃねえ」と早くも手がのびて、玉代の頭を小づいた「氷を買って来う！」

Mは、はてこれは、と思った。誰かわるいのかな。彼は細君に話した。すぐさま細君は様子を見に行った。すぐ戻る筈で出たのに、小半時もいてかえって来た。

「大変なのよ」と彼女はアトリエに入って来るなりいった「貫坊は今朝からむずかかってたみたい……ちょっと変よ。心配だな。わるくするとエキリかも……そういつて、すぐ医者を呼ぶようにおキンさんをおどかして来たわ。今時分は吉ペちゃんがお医者へ走ってる頃と思うわ」

「エキリ？ おかしいなあ、玉ちゃんどんな顔もしてなかったぜ」

「あの子変わり者だから」

「それにしても、貫坊はとくべつだぜ。いちばん可愛がってるじゃないか」

細君は心配でまた出かけて行つた。医者が来たらしばにいて、よく処置を聞いといてやらなくちゃと考えてのようだった。別段家主だからというわけではない。亭主を尻に敷き、子供を鳴りとばす癖はあつても、近所界隈の奥さん方にはとても愛想がいいし気前もいい。ガブガブお茶をふるまう。この子沢山の関取女房のこんな気っ風を、Mの細君はかねてから気楽に好いていた。こんなわけもあつてだ。亭主は小男で働き者だ。隣市のT物産で常雇人夫をしている。休日には、M家の何から何まで厄介仕事はみんな引き受けてくれる。Mはこの亭主に「デルトオッチェーン」の愛称を奉った。うまくドイツ語の感じが出ているだろう、と語源の説明を細君にして得意にな

っていた。Mの住居の東脇の櫓きよの垣根の外側が路地になっている。そこを亭主は彼の足には大きすぎる払い下げ軍靴をはいて、毎朝勤めに出て行く。学校通いの児童たちも通る。ところでその生垣はあまり背が高くない。並の大人なら首から上が出て、あれは誰だとすぐわかる。頭の出ないのは児童ばかり。それと残念ながらこの亭主だ。或る朝Mが茶の間で朝の茶を飲んでいた。垣根の外に足音を聞いた。子供とばかり思っていたところ、やがて垣根が付き、姿が出ると、それが向かいの亭主だった。亭主は家族からも近所の人からもオッチャンと呼ばれている。まったく子供とばかり思っていたのに出るとオッチャンだった。そこで「デルトオッチェーン」

デルトオッチェーンは、家の西脇にブドウを二、三棚仕立てていた。収穫期となる。女房は棚の下で亭主を呼ぶ。あっさり抱いて軽く差し上げる。こうする方が手っとり早いから、彼女は踏台を必要としなかった。こうして得た収穫のおすそわけを、Mはカンバスに写してから頂戴した。或る時関取女房が泣いて来た。とうとう立廻りゲンカをしました。流石に男で、ケンカになるとやっぱりあっちが強かった、とMの細君の前で泣きじゃくった。けっこうじゃないの、男だもの、とMの細君は祝福してやった。それもそうですが奥様、ケンカがはじまると、子供がみんなして、父ちゃんばかり応援するんです。しっかりってね。それだってくやしいです、となおも泣くのだった。また或る時、あまりあっけなく勝負が過ぎました、なさけない亭主ですといつてこぼしに来た。いいじゃないの、あんなに沢山子供を産ませてくれた旦那さんなんだから、少しぐらいあんたよりケンカが弱くたって——あんた子供はいくらでもほしっていったじゃ

ないの。文句いうことないわ、と知恵をしぼったこともあった。そういえばほんとだね奥様、男でなければできない芸ですもんね、とはじめてその道でオッチャンの実力を認めたという話もある。永い間にはいろいろあるものだ。

ところがその日の夜更け、Mはいつものようにアトリエでひとり起きていた。オッチャンの家の灯がめずらしく樹間に洩れていた。貫坊がよくないのかな、とMはサンダルをつっかけて庭におりた。煙草の吸いじまいを暗い大地にねじつけた。満天星のむこうに人が立っていた。びっくりした。

「だれだ？」

「おしっこ」

「なーんだ、玉ちゃんか。なるべく水道の近くではするな」

「……………」

ここを玉代が自分専用の場所と決めたのは、けだしここが最高に落ちつけたからであろう。

「おしっこしながら泣いちゃったの」

「泣くときもそこか？……貫坊がわるいのか」

「ええ。それもそうだけど……」

と彼女は樹の間から出てくると、無遠慮にMに身体をぶつつけてきた。裸でこそないが、その

薄いアップパの下にはひるま見たあれが潜んでいる筈だ。彼は手の甲のあのタンポポの花のくすぐりを、いやおおなしに呼びさました。水道端の足もとのわるさで、とうとう追い詰められたといった感じで、彼は芸術至上主義も案外いやつたらしい、と咄嗟に思ったりした。

「あしたから」とほんとに玉代はシクシク声だった「ひと月間、あたい子守できなくなったの。そのあいだ働かないでいると、オッチャンと母ちゃんが喧嘩になる。オッチャンがかわいそう……」Mはそのことなら、さっき細君から聞いたばかりだ。玉代の今の雇主八百栄では、玉代の家にエキリが出たとわかった以上、当分家の子供を玉代に子守させるわけにはいかない。家へ来てもいけない。こういったそうだが、そういうのもムリがないと思った。玉代はS鉄道の農場をおはらいばこになってからだいぶになる。

「これまでのように、あたしん家へ連れて来て遊ばせなければいいでしょうっていったんだけど、いけないって」

「八百栄でそういうのもあたりまえなんだよ。なにしろエキリだからな」

「でもおじさん、年中空身（からみ）でいられるってこと、たいしたことだね。考えただけでうきうきしちゃうもん。うそみたいに身体がふわふわしてくるもん」

「そうだろうな玉ちゃん……休暇をとったつもりで、これからの一カ月休養しろや。そしてまたあとで頑張るさ」

彼女はオッチャンのかわいそうぐらい、久しぶりに背中の子供から解放されるよろこびにはか

えられない、といった顔をした。

「ねえおじさん、ひるま見た壁の裸の絵ねエ、やっぱり誰かを、さっきあたいにさせたみたいにして描いたの？」

「そうだよ。モデルといってね、裸を描かせてくれる人がいるんだ」

「いやったらしい！」

「いやったらしいもんか。りっぱな職業なんだ。それにいい商売になるんだ」

「ふーん……どのくらいに？」

「そうだな、半日で四百円ぐらいかな——もっとそっちへ寄りなよ。玉ちゃんのオッパイがじやまになってこまってるんだ」

「あたい、オッパイが大きくて、いやでしかたがない。なんでお乳だけこんなに大きいんだろ……？」

にわかに彼は星空に気がついた。サソリ座はだいぶ宵から位置を変えている。真上にカンムリ、天の川にまたがって白鳥、龍座が北の空から雄渾であった。まったく暗い。

「どかないのか、玉ちゃん！」

と、彼は彼女の腰のあたりを掌で押した。かぼそくしなうような身体であった。彼女はMの加えた力に抵抗した。二度目に押したとき貧相な肋が掌に触れた。貧相とはいえ肋は女性の身体の不しぎな場所だ。物いう場所だ。思わせぶりの場所だ。そして少女のそれは神秘でさえある。彼

はこれに隣接したこの少女のあの驚くべきもう一つのものから、立往生させられぬうち、一刻も早く逃がれねばならぬと考えた。あの丸い丘はいま冷たく夜気に冷えて、この世の煩惱の極致を造化しているか知れない。ロダンは男女モデルを幾人か彼のアトリエに放置した。彼はそのあらしの乱舞の中から一瞬の天啓を捉らえて、個のポーズを創造したという。モデルたちがそれぞれ本来の男女に立ち至っても、ロダンはその自由を制さなかったとも聞く。玉代の肉薄く仰け反った身体が、Mの腕の中で骨の音を立てた。

彼は玉代の家の東口に廻った。廂の下がにぎやかだった。戸を明け放ったまま、いまや玉代の弟妹たちが夜の大事業の最中であつた。Mが頭をつついて、半分睡っていた。次ぎから次ぎと四人つづいての大雨降らしだった。寝呆けてはいても、さすが女の子は、しゃがむことは忘れない。

オッチャンが、火のついた線香を指の先に持って、土間にぼんやり立っていた。夕方母ちゃんと病院へ行った貫坊のことが、頭から離れないのであろう。

「貫坊はどうだね？」

「さあ、どうなんでしょうね。ダメかもね……」

「そんなことはあるまい。オッチャン、線香線香……もう済んだんだらう？消したらどうだい、指を焼くぜ」

「おっとそうそう、おいらも寝呆けてたかな」と、ふたをとりっぱなしの風呂桶の中に、その

短くなった線香をチッと投げ込んだ「毎晩一回この騒動でさあ……かないませんや。ただ起こしたんじゃあ埒があきませんからね、お線香でさあ。これは餓面（うしろめ）でさあ」

「その新方法は家内から聞いたが……ちよっとね」

「家の餓鬼共ときちゃあ、どいつもこいつも夜のしょんべん癖がわるくってね。一人だけいいのがいたと思えば、エキリなんかになりくさって……」

「へええ、貫坊がねえ」

「そうなんですよ。一番上の玉公ときたら、いまだにうっかりするとやらかすんですからね。でもやっとこの頃は、お線香の厄介にもならず、ひとりで起きて外へ出ますだ。いまもそれで外でさあ」

「……………」

Mはちよっとまごついた。さてそろそろこの場はお暇なくちゃあ、と考えた。まだ腕に残っている玉代の軽い体重が、さまざまな想いをふりかえらせた——抱きよせてみたら板のようにはりついてくる下腹部だった。肋のポキポキ音する身体だった。それとそんな環境をわきまえず自分ひとり育ち過ぎた場ちがいみたいな乳房だった。どうしたってあれではあの子そのものが芸術至上主義だ。

彼は寝臭い土間から外に逃がれ出た。それにしても、と想ってみた——何から何まで白痴のよいうな彼女の振舞いを、あたまから貴重なものとは決め込んでよいものか。あるときはたちまち覚え